平安京跡出土文字資料研究の現状と課題

吉　野　秋　二

要　旨

本稿は，平安時代の平安京・近郊地域を対象とする出土文字資料研究の研究史を俯瞰し，現状を評価し，今後の方向性について提言したものである。まず1960年代以後の研究史を概観し，平安時代の平安京・近郊地域を対象とする調査・研究の全体状況を概説した。次に1994年の『平安京提要』発刊以後の調査・研究について，仮名資料など重要事例を中心にその成果を振り返った。最後に，今後の調査・研究の課題について，自説を述べた。

キーワード：出土文字資料，平安京，木簡，墨書土器

1. はじめに

本稿が，平安時代の平安京・近郊地域を対象とする出土文字資料研究の研究史を俯瞰し，現状を評価し，今後の方向性について提言するものである。

2. 全体的状況

日本古代の出土文字資料研究は，奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所）と木簡学会を核として，藤原京跡・平城京跡を中心に進展してきた。現在では，藤原京・平城京以外でも調査・研究が進展し，出土文字資料を集成した報告書･資料集などが多数出版されている。また，地方の古代官衙･寺院・集落跡等の出土遺物に関しても着実な成果が蓄積されている。

1979年，岸俊男氏は，木簡学会『木簡研究』創刊号巻頭言で，日本の木簡学の基礎的・本質的問題として「中国の簡牘との関係やその日本への伝来過程」,「多種多様な木簡の分類とその性格・機能の究明」を例示した。その上で，文字だけではなく形状･材質など木簡そのものの情報を，出土状況･伴出遺物に関するそれとともに精密・的確に把握し，保存を推進することの重要性を説いた。出土文字資料研究における究極的「問い」は，「なぜモノ（物）に文字が書かれるのか」というものである。列島の文字文化は，律令制成立期に官司と寺院を拠点として飛躍的に進展する。先行研究の多くは，木製品・土器・瓦といったモノに文字が書かれ始める時代を対象に先の「問い」に取り組んできたわけである。

本稿が対象とする平安京・近郊地域は，周知の通り有形・無形の文化財の宝庫で，重厚かつ多角的な研究の蓄積がある。歴史学分野の成果は，1994年，古代学協会・古代学研究所編集『平安京提要』

(角川書店) に考古学分野を中心に総括された。本書は全 1059 頁の大冊で,「総括」「平安京の構造」「平安京の近郊」「平安京の遺物」「平安京研究史と研究史料」の 5 部構成の下，発掘調査成果を克明に紹介する。しかし，出土文字資料関係の項目は，墨書土器が全 6 頁，木簡が全 18 頁で，計 24 頁に過ぎない。1994 年時点では，この地域の出土文字資料は限定的数量で，調査・研究成果における比重が小さかったのである。

1994 年以後も, 平安京･近郊地域を対象とする学際的研究は進展している。代表的出版物としては, 西山良平･藤田勝也編『平安京の住まい』（京都大学学術出版会，2007 年），西山良平･鈴木久男編『古代の都 3 恒久の都 平安京』（吉川弘文館，2010 年），西山良平・藤田勝也編『平安京と貴族の住まい』（京都大学学術出版会，2012 年），西山良平・鈴木久男・藤田勝也編『平安京の地域形成』（京都大学学術出版会，2016 年）がある。

平安京跡の発掘調査は，さまざまな機関によって実施されている。中心的役割を果たしている（公財）京都市埋蔵文化財研究所は,『平安宮Ⅰ　京都市埋蔵文化財報告書第 13 冊』（1995 年）など調査成果を集成した出版物を刊行している。また，発掘調査報告書・研究紀要をはじめ，一般市民を対象とした文化財講座の資料まで幅広くホームページで公開している（https://www.kyoto-arc.or.jp/blog/siryo_info_res.html）。

京都市埋蔵文化財研究所以外の成果としては，京都市文化財保護課編『京都市文化財ブックス第 28 集平安京』（2014 年）が代表的発掘調査事例を端的に紹介した資料集として有益である。また，長宗繁一「平安京跡イメージマップ」（京都渡来文化ネットワーク会議，2014 年）は，現代京都の地図上に平安京域の遺跡情報を発掘調査成果も含め詳細に図示したもので,「平安京オーバレイマップ」として Web 上でも公開されている（https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/heian/）。

現在，出土文字資料の基本情報は，奈良文化財研究所や明治大学古代学研究所によりほぼデーターベース化されている。しかし，木簡・墨書土器など出土文字資料を専門に扱った報告書・史料集は, 平安京跡に関しては発刊されていない。2014 年に京都市考古資料館･平安京創生館･京都産業大学ギャラリー三館合同で「三館合同展 平安京の文字 ー掘り出された歴史ー」が開催されているが目録のみで図録は刊行されていない（木器全般に関しては，最近，京都市文化財保護課編『京都市文化財ブックス第 26 集木器事始』（2023 年）が発刊され代表的遺物が通覧できるようになった)。

したがって，例えば，木簡の場合は，奈良文化財研究所ホームページ木簡庫と木簡学会編『木簡研究』などの情報と発掘調査報告書の現情報を個別に参照する必要がある。木簡庫の情報は『木簡研究』のそれをベースにしているので,『木簡研究』に報告されていない調査事例に関しては, 木簡庫に載っていない場合がある。それ以外の出土文字資料，例えば，墨書土器・文字瓦に関しては，明治大学古代学研究所のデーターベースのみで,『木簡研究』にあたる情報誌が存在しないので，情報蒐集が難しい場合がある。

地方の古代官衙・寺院・集落跡等の出土文字資料の調査・研究を領導した平川南の業績,『墨書土器の研究』（吉川弘文館，2000 年),『古代地方木簡の研究』（吉川弘文館，2003 年）などは，調査・

研究の方法論，資料の全国的状況を開示した成果としても重要な役割を果たしている。平安京跡については，現在のところ，こうした出版物も存在しない。

そのため，研究者の多くが資料の増加・多様化について行けない状況にある。こうした状況の克服を目指す必要がある。

3.『平安京提要』以後の調査・研究

本章では，前章を踏まえ，具体的な調査・研究成果を俯瞰し，特色を論じる。

前述したように，古代学協会・古代学研究所編集『平安京提要』（角川書店，1994 年）の第四部平安京の遺物には，出土文字資料について概括した部分がある。

まず第二章土器と陶磁器では，平安京の土器・陶磁器を，土師器・黒色土器・瓦器，須恵器，緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器，貿易陶磁の種別に概括した上で，6墨書土器で（吉村正親）平安京・近郊地域出土の墨書土器を，①平安宮の墨書，②平安京の墨書，③京近郊の墨書に分けて概括し，特徴的な墨書土器を考察している。③では北野廃寺, 鳥羽離宮跡出土の墨書期が取り上げている。著者は，平安京・近郊地域の墨書土器に，イ律令制的墨書土器群，ロ吉祥句的墨書土器群の二つの流れを見いだし，後者は時代が下がるに従って密教・道教・陰陽道等の影響を受けるとする。

一方，第四章木簡（網伸也）では，平安京・近郊遺跡出土の木簡について，まず A4 判平安京および周辺木簡一覧に基づき，出土地点の特徴が概観される。1994 年時点の出土木簡を俯瞰し得る貴重な成果である。その上で文書様木簡が少ないこと，呪符木簡が多いことなどの特徴が指摘される。最後に西市周辺の木簡について，調査地と出土木簡の概容，形態による分類が考察され，記載内容を踏まえて，出土地周辺の施設の性格に関する推論がなされている。本稿は，網伸也『平安京造営と古代律令国家』（塙書房，2011 年）にも収録されている。現時点においてもなお西市周辺は，平安京・近郊における最多数の木簡出土地であり，本稿のもつ研究史上の意義は大きい。

『平安京提要』が出版された 1994 年は，1991 年 2 月にバブル経済が崩壊し，「「失われた 10 年」に突入した時期にあたる。バブル崩壊は開発行為の減少を招き，発掘調査は減少することになった。1990 年代には奈良県明日香村の飛鳥池遺跡，徳島県国府町観音寺遺跡の発掘調査で七世紀代の木簡が多数出土したが，これらは全国的に見れば例外的事例にあたる。長岡京域では，1999 年～ 2001 年にかけて実施された東院跡の調査を最後に，木簡がまとまって出土する調査は格段に減少した。

平安京・周辺遺跡の考古学的調査もこうした趨勢の大きな影響を受けた。しかしながら，出土文字資料に関しては，むしろ 20 世紀末から研究史を画するような重要な発掘調査が出現することになった。

しかし，1994 年以後，2000 年代初頭にかけて，右京三条一坊三町右京職跡，右京三条二坊十六町斎宮邸跡など，出土文字資料が出土遺構の性格を決定づける調査事例が出現した。

この内，右京三条一坊三町の発掘調査では，九世紀前期の掘立柱建物跡と礎石建物跡が重複する形で検出され，建物の周囲を囲む溝跡からで「計帳所」「右籍所」「籍所」「人給」などと書かれた墨書

土器が 100 点以上出土した。また，南端の落ち込みで両面に「弘仁七年」と記された題籤軸一点が 9 世紀前半の土器を伴出して出土している。いずれも右京職の文書行政に関わる遺物である。

また，右京三条二坊十六町斎宮邸跡の調査では，建物･園池遺構が検出され，園池遺構から，「斎宮」「斎雑所」などと書かれた墨書土器が大量に出土し，伊勢神宮に奉仕する斎宮が京に在住した時期に居住した邸宅であることが明らかになった。

こうした状況は，2010 年代に入って加速する。

まず，2013 年の右京三条一坊六町推定藤原良相西三条第跡の調査では，邸宅園池遺構から「三条院釣殿高坏」と記された高坏と共に，9 世紀後半期の仮名墨書土器約 20 点が出土した。10 文字以上に及ぶものも多く，中には多面体の高杯首部に細字三行でびっしり墨書されたものもある。字体も多種・多様だが，連綿が進み，平安中期以後の「平仮名」と大差のないものも多い。従来一般に 10 世紀以後とされていた「平仮名」成立史に再考を迫る発見となった。

続いて 2014 年の左京九条三坊十町の調査では，9 世紀初頭の園池遺構から，平安時代初期の木簡全 16 点が出土した。弘仁 6 年（815）3 月 10 日付の文書木簡で，施薬院の預（領）が，収容者の死去について報告したものなど施薬院関連木簡としてまとまった内容を持つ。薬物・薬物原料名が記された付札・荷札木簡も含まれ，平安遷都直後期の施薬院の実態が明らかになった。

また，左京四条一坊二町の調査では，井戸跡から 9 世紀末期の土器を伴出して，右行に「難波津の歌」全文, 左行に仮名の散文が書かれた木簡が出土した。和歌が書かれた木簡に関しては, ①典礼（歌会などの儀式・儀礼）の場で和歌を詠む際の道具として使用されたもの，②習書・試し書き，という二類型が想定されているが，当該木簡はいずれにも当たらない。『古今和歌集』成立直前期の貴重な一次史料として，今後，和歌研究にも重要な意味をもつものといえる。

以上代表的事例を抽出して概説した。　出土文字資料に関しては，『平安京提要』発刊以後，質・量の両面で資料状況は一変したといえる。こうした状況を受けて，それらを活用した研究も発表されている。特に仮名資料を取り上げたものが多い。

例えば，西三条第跡出土の仮名墨書土器に関しては，皿底部に鮮明に数十字の墨書がなされた一点が取り上げられることが多い。南條佳代「藤原良相邸跡出土墨書土器の仮名表記に関する考察Ⅱ」(『語文』24，2016 年）は，当該土器について報告書の釈文の一部を「いくよしもあらしわかみを」と変更し，『古今和歌集』巻 18―934 の「幾世しも あらじ我が身を なぞもかく 海人の刈る藻に 思ひ乱るる」の上句と一致すると主張している。中山陽介も「仮名成立史上の西三条第跡出土土器墨書仮名の位置付け」(『國學院雑誌』117-7，2016 年）など一連の論文で当該土器を取り上げ，書道史の観点から，平仮名成立史に仮名墨書土器を位置付ける試みを行っている。

また，犬飼隆「平安京出土「難波津」木簡の価値」(『日本歴史』824，2017 年）は，平安京左京四条一坊二町跡出土の「難波津」木簡について歌木簡説を批判しつつ，木簡作成の背景に踏込んだ推論を提示している。左行と右行の記載の関係性を如何に捉えるべきか，この木簡の論点に切り込んだ重要な成果といえる。

従来，平安前期の仮名資料は限定的で，対照資料の不足が研究の壁となっていた。しかし，21 世紀に入って 9 世紀に遡源する仮名資料が数点出土し，鈴木景二「富山県赤田Ⅰ遺跡出土の草仮名墨書土器（『木簡研究』31，2009 年）などの先駆的研究が発表されていた。2010 年代に入って平安京跡から出土した仮名資料群は，先駆的研究の先見性を証明すると共に，研究状況を一新する可能性を秘めたものといえる。

西三条第跡仮名墨書土器の公表後，日本史学･国語国文学を中心にさまざまな学会で，平仮名成立･展開をテーマとする研究集会が開催された。日本史学関連では，日本史研究会が例会の成果を『日本史研究』639 号（2015 年）「仮名文字といろは歌をめぐる諸問題」にまとめている。山田健三「「成立期の仮名」をめぐる日本語書記システム史上の諸問題」，吉崎伸「平安京左京三条二坊九町（堀河院）跡出土の「いろは歌」墨書土器」，新名強「「いろは歌」と仮名文字の普及」，丸川義広「平安京右京三条一坊六町（藤原良相邸）出土の仮名墨書土器をめぐって」の 4 本の論文と鈴木景二のコメントを収録している。出土文字資料による平安時代仮名研究の基点となる成果といえる。

しかしながら，現時点において本格的な研究の対象となっているのは一部の仮名資料に過ぎない。西三条第跡仮名墨書土器に関していえば，連綿の進んだもの，そうでないものなど墨書は一様ではない。「読めないものは評価できない」ということで，比較的解読が容易なものに研究が集中している憾がある。これは望ましい研究動向とは言い難い。本格的な学際的共同研究がなされ解読が進展することが望ましい。

以上，仮名資料について詳述したが，それ以外に関しては，門田誠一「平安京出土「神油幡身」木簡」（『出土文字資料と宗教文化』思文閣出版，2022 年，初出 2015 年），岩本「平安時代の施薬院使」（『延喜式研究』30，2015 年），同「平安京施薬院の整備と労働力編成」（『日本史攷究』40，2016 年）などが目につく程度に過ぎない。

以上，『平安京提要』以後の調査・研究について概観したが，最後に筆者自身の現在までの調査・研究成果，今後の研究の方向性について述べたい。

筆者が出土文字資料の調査に従事したのは，京都大学大学院博士後期課程在籍時，（財）向日市埋蔵文化財センターでのアルバイト勤務が最初である。その後，先述の平安京右京三条一坊三町右京職跡の調査などを皮切りに，京都市埋蔵文化財研究所による出土文字の解読作業に参加し始め，京都産業大学に就職した 2010 年以後は，報告書の分担執筆，記者発表での説明などの役割も担っている。2020 年 4 月には，研究所から「平安京・中世京都における出土文字資料の研究」に従事する客員研究員に任命された。

筆者の出土文字資料研究と連関する研究成果としては，吉野秋二『日本古代社会編成の研究』（塙書房，2010 年）に収録されているものの他に，学術論文として，吉野秋二「三春高基邸の「店」－平安京市辺の商業－」（舘野和己編『日本古代のみやこを探る』勉誠出版，2015 年），吉野秋二「平安京跡左京九条三坊十町（施薬院御倉跡）出土の木簡」（『古代文化』第 67 巻第 2 号，2015 年），吉野秋二「平安京跡左京四条一坊二町出土の木簡」（『古代文化』第 68 巻第 2 号，2016 年），吉野秋二「平

安京を探る」（川尻秋生編『古代文学と隣接諸学 8 古代の都城と交通』, 竹林舎, 2019 年）などがある。また，京都市埋蔵文化財研究所発刊の報告書に，吉野秋二・丸川義広「木簡」（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　平安京右京三条一坊六・七町跡－西三条第（百花亭）跡－』2013 年），吉野秋二「墨書土器と文献史料」（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告　2017-15』2018 年）を寄稿している。

これらの個別の調査・研究成果を踏まえ，木簡に関して，2023 年 12 月 2 日の第 44 回木簡学会研究集会（奈良市奈良文化財研究所資料館講堂）で口頭報告「平安京跡出土木簡の概容と特質」を行った。その成果は活字化する予定で準備を進めている。本論を結ぶにあたり付言しておく。

4. おわりに

以上，本稿では，平安京・近郊地域を対象とする出土文字資料研究の調査・研究史を俯瞰した。

平安時代，特に中期以後，出土文字資料が減少することは間違いない。その要因としては，紙の普及という書記材料の変化がその主たる要因として想定されている。しかし，木簡や土器には堅牢性など紙に勝る特性もある。こうした点も含め，何が残り，何が消滅するのか，出土文字資料の推移を追究する必要がある。

かつて，角田文衛「銘辞学の方法」（『文化史学』18，1951 年）は，「文献」を，文詞の所在地を変えても転写しても効果が損なわれない一般文献と，文詞と器物・物体とが不可分の関係にある特殊文献に区別し，後者を「銘辞」と称した。さらに，荷札・付札木簡を「物品に添付される標札」として「銘辞」の典型として挙げ，碑文・墓誌などの歴史資料のみならず，看板・のし紙などの文字も含まれると主張した。出土文字資料の機能論を通時代的・比較史的視座から推進し得る仮説である。また東野治之「奈良平安時代の文献に現われた木簡」（『奈良国立文化財研究所 研究論集』Ⅱ, 1974 年）は，「簡」「牘」「札」「短籍」などに関する史料を蒐集し，現物と照合しつつ，木簡の種類・機能とその沿革を論じている。近年の資料の増加を踏まえ，こうした古典的研究を再評価する必要がある。

前述したように，出土文字資料研究における究極的「問い」は，「なぜモノ（物）に文字が書かれるのか」というものである。平安時代の出土文字資料研究の核心は，モノに文字が書かれなくなる原因・背景を実証的に追究することにある。

近年, 中国･韓国では, 出土文字資料が飛躍的に増加し, 角谷常子編『東アジア木簡学のために』（汲古書店，2014 年）など，東アジア木簡学の構築を目指す動きがある。中国史に関しては木簡が消滅する時代も視野に入れた形で研究が進展している。これらの成果を批判的に継承し，平安京・近郊地域の出土文字資料群を国際的比較史研究の基準資料とすることを目標として調査・研究を推進するつもりである。

Current status and issues of research on written materials excavated from Heiankyo ruin

Shuji YOSHINO

Abstract

This paper provides an overview of the history of research on excavated written materials in Heian-kyo and its surrounding areas during the Heian period, evaluates the current situation, and proposes future directions. First, I gave an overview of the history of research since the 1960s, and gave an overview of the overall status of surveys and research targeting Heian-kyo and its surrounding areas during the Heian period. Next, I looked back at the results of research and research conducted since the publication of the "Heiankyo Teiyo" in 1994, focusing on important cases such as kana materials. Finally, he expressed his opinion regarding future research and research issues.

Keywords : excavated written materials, Heiankyo, wooden tablets, ink calligraphy earthenware